

首里城の歴史を振り返る

首里城の歴史を振り返ると、そこには琉球・沖縄が受けてきた厳しい歩みが浮かび上がってきます。

首里城は14世紀の後半から約500年にわたって琉球王国の政治や文化の中心地でした。

1609年、薩摩・島津軍によって侵攻を受け、国王・尚寧王(しょうねいおう)は首里城を開城しました。これ以降も琉球王国は存続しますが、薩摩の強い影響下に置かれました。

1879年、明治政府によって「琉球処分」の名のもとに「琉球国の併合」が行われます。その時、首里城には軍隊と警察およそ600人を引き連れた「処分官」が入城し、首里城は明治政府に明け渡されたのでした。

その後、主(あるじ)をうしなった首里城は幾度

となく破壊の危機にさらされます。1924年には重要な建築物であるとの専門家らの指摘により、寸前のところで解体を免れ、その後国宝となりました。

ところがその国宝・首里城の地下に、1944年12月、来る沖縄戦に備え沖縄守備軍(32軍)司令部壕の造営がはじまり、翌年3月には司令部がこの壕に移ります。その結果、首里城周辺では激しい戦闘が繰り広げられ、首里城は壊滅しました。

戦後は米軍が琉球大学を首里城跡に設置しました。後に大学が移設され、1989年に首里城正殿の復元がはじまります。そして2019年1月に約30年に及ぶ周辺を含めた復元工事が完了しましたが、同年10月31日未明、首里城正殿が火災で焼失されました。

(参考:教養講座『琉球・沖縄史』新城俊昭著/東洋企画刊)

歴史の小話「御影堂再建と首里城!？」

1877年、真宗禁制下の琉球で、真宗門徒369人が捕縛される事件が起きた。この事件の解決と真宗解禁に向けて王府(当時は琉球藩)との交渉の為に本山から派遣されたのが小栗憲一(1834～1913 大分県。大谷派教師、後に真宗京都中学校長、嗣講)である。

この事件はいわゆる「琉球処分」と言われる琉球国の併合に関連する出来事とされ、明治政府がこの事件を利用した側面が強いともいわれている。しかし歴史的評価はまだ確定していない。この小栗の滞在中の日記『琉球日記』(大分県佐伯市・善教寺蔵)が近年発見されている。この中で小栗が真宗解禁の交渉を王府に申し入れるが、様々な理由をつけて先延ばしにされていく中、打開策の一端として右のような手紙を王府の要職にあった役人に出したと記されている。



小栗憲一作の『那覇港至首里城図』の「首里城」部分
／沖縄県立博物館蔵

親里親雲上殿

酷暑の中、いよいよご清祥のみぎりお喜び申し上げます。先日は、識名南苑において、初めてお会いし、その節は「路次楽」の演奏を近くでお聴きし、夏の風習をよろこびましたこと、ひとかたならず敬い感謝しております。

さて、この首里城内の御正殿のことですが、建築の組み立ては、もっぱら明国の様式に模して造られていることは、私も承知しております。長く海外に行くことがありませんでした。このたび、図らずも琉球に渡る機会を得ました。どうか、その御正殿の拝観をお願いしたいのです。

実は、本山(東本願寺)の本堂も二層の組み立てでありまして、唐風の造りに模倣していましたが、火災後、ただいま再建を計画し事業を始めることになりましたので、御正殿を拝見することができましたならば、私共の本山の再建の参考にも出来ませう。

私が京都へ戻るについては、大教正(法主)へ数ある土産の中でも、一番のものとなります。どうか御取次ぎいただけませんか。今回、面識ができましたので、このようなことをお尋ね申し上げます。

明治十一年八月八日 小栗憲一頓首